

散りぬれば
 後はおくたに
 なる花を
 おもいらすも
 惑う蝶かな
 僧正遍昭

實相寺 花園會報

お寺の掲示板

令和四年
 四月一日発行
 発行所
 臨濟宗妙心寺派
 陽明山 實相寺
 實相寺花園會
 〒761-0450
 高松市三谷町
 1811番地1
 TEL087-889-3838
 編集発行人
 山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第156号

「吹き散ってしまえば、あとはごみでしかない花をそつとも知らずに、その花の色香に惑う蝶であることよ。」

『道歌教訓和歌辞典』

もともと小子高齢化や地方過疎の問題がありましたが、コロナに加えてウクライナ侵略で、戦後日本の様々な常識が大きく揺らいでいます。

少し辛口な道歌ですが、今回、物事の本質を見つめ、自分にとって本当に大切なものとは何か？を問い直す機会であると感じました。

本堂の音響設備について

本堂の音響設備は長らく80年代当時、花園会役員だった長谷川正一さんが自作されたアンプとスピーカーでした。ただアンプにはマイク用の入力がないので、十年ほど前からミキサーを介して無理矢理2本のワイヤレスマイクを繋いでいたので、使用時にはノイズが気になっていました。



その為、音響設備の更新が長年の懸案でしたが、最近アマゾンでたまたま安い中国製のアンプを見つけました。小さいですが容量は十分で、配線するとちゃんと音も出ました。

長谷川さんは五年前にお亡くなりになりましたが、これでまたしばらくは長谷川さんのスピーカーを使い続けることが出来そうです。



お釈迦さまの伝記・仏伝について①
 お釈迦様は五人の比丘に最初の説法「初転法輪」をされました。その内容は「中道」と「四聖諦」でしたが、この時に一つの事件が起こります。それは五人の内コンダンニヤという比丘が悟りを開いたのでした。そしてお釈迦様に「どうか私を弟子にして下さい」とお願いしたのです。

仏伝というのは、単なるお釈迦様の伝記ではありません。仏教という宗教、組織がどの様に形作られていったかを伝えることが元々作られた目的でした。例えば、現在の戒律では、新たに出家するには十人の僧侶の許可が必要とされています。しかしこの時にはまだ十人の僧侶は存在しません。そうすると後世の人達からは「最初の頃の僧侶

は一体どうやって出家したのですか？昔の出家者は皆インチキですか？」という疑問が出て来ます。そうした疑問に対応するために、仏伝という仏教教団成立史が必要だったのです。

さて、お釈迦様はコンダンニヤの願いを聞き入れ、共に修行生活をするこゝとなりました。この時に最初の弟子、僧侶が誕生したのです。更にお釈迦様がお説法を続けていく内に、ヴァッパとバツディヤの二人が悟りを開いて弟子となり、残ったマハーナーマとアツサジの二人も、その後悟りを開いて弟子となりました。こうして仏教教団はお釈迦さまを含めて六人で出発することになったのです。

なお現在、僧侶になることを出家するとか、受戒すると言いますが、恐ら

く元々は僧侶になることは全て出家すると言っていたと思われまゝす。しかし時代が下がるにつれ、僧侶になるのに二段階が必要になりました。それが出家と受戒の違いです。仏教僧になりたい人は、先ず出家して僧侶としての見習い期間を経て、その後受戒して正式な僧侶になるという制度になりました。また成人しないと僧侶にはなれないので、未成年の者は出家して見習いとして過ごし、二十歳になったら授戒すると言ふこともあった様です。

仏伝には「コンダンニヤはお釈迦様の教えを聞いて悟りを開き、そして出家し、受戒した」と書いてあるので、この仏伝が成立した頃には、既に二段階の出家システムが出来ていたと考えられます。恐らくお釈迦様の時代は、

もっとシンプルだったでしょう。しかし組織が調ってくるにつれ、様々な制度が作られて、それが昔の仏伝にも反映して「出家し、受戒した」という風に書かれているのだと考えられます。

なおこの二段階制度は現代の日本でも残っていて、単に出家するという場合、僧侶になるという場合と見習いになるという場合の二種類があります。受戒するという場合は正式な僧侶になるという意味しかありません。この見習いのことを沙弥、沙弥尼といい、正式な僧侶を比丘、比丘尼といいます。

因みにお葬式も儀式の半分は受戒作法であり、受戒したから戒名が授けられるのです。

佐々木閑先生の動画↓

